

静岡県立大講師、林秀樹さん 極限の病院 患者と向き合い

5/3(火)産経

被災地を駆けつけた 無名戦士たち

被災地を駆けつけた 無名戦士たち

「まるで野戦病院のようでした。現代の日本でこんな状態になるのかと…」

震災直後の混乱期にボランティアの薬剤師として石巻赤十字病院に入った林秀樹さん(38)は、当時の惨状を思い起こし目を伏せた。

災害時の医療支援では医師や看護師が注目されがちで、薬剤師にスポットが当たるとは少ない。しかし早い時期に現地入りした林さんは「被災地で改めて薬剤師の役割の重要性を痛感しました」。

毎日16時間立ちっぱなしで調剤を続け、両足がむくんで腫れ上がった。睡眠時間は2、3時間ほど。病院の廊下に持参した寝袋を並べて雑魚寝した。

その間にも病院には、がれきの粉塵でぜんそくの症状を起こしたり、傷を治療



〈はやし・ひでき〉静岡県立大学講師、薬剤師。所属する日本病院薬剤師会などのボランティア募集に応じ、3月23日から4月5日まで、石巻赤十字病院と女川町立病院に派遣された。

「薬剤師の役割 重要性を痛感」

できず破傷風の一手手前になつたり…。被災地特有の患者がひっきりなしに訪れる。

津波で1階が壊滅した女川町立病院にも派遣された。

「周囲のがれきの下には多くの人が埋もれていると聞かされました。これまでにない鼻を突くようなにおいがしました」

病院に続く細い道路は、漂流物を除去してわずかに確保されたもので、両脇には高々とがれきが積み上がる。「もしも今大きな余震

が起きたら、このがれきにのまれるのか」と体が震えた。

津波で1階が壊滅した女川町立病院にも派遣された。漁船がひっくり返る目の前の光景は、想像の範囲をはるかに超えていた。

病院を出て、避難所を巡り、その場で薬を手渡すことも重要な任務だった。とりわけ高血圧や生活習慣病など慢性的な疾患を持つ患者が、普段服用している薬を手に入れたときの、ほっとしたような表情は忘れられない。

「彼ら自身、家族や友人が行方不明だったり家が流されたりしていた。僕らが到着すると『ようやく休めます』『初めて自宅に帰れます』と、疲れ切った笑顔で報告してくれました」

一人一人が自分を守るために精いっぱい震災直後の混乱期に、薬剤師だからこそ果たせる役割がある。

極限の病院で体にしみこませた多くの思いを、「これから薬剤師を志す若い学生たちに伝えたい。被災地支援について平時からマニュアル化する重要性も訴えたい」。

薬剤師として教育者として、長い復興期を支える若者たちに、自らの体験をありのままに語るつもりだ。

（田中万紀）



避難所を訪問し、被災者の健康状態を確認して薬を調剤するボランティアの薬剤師。4月3日、宮城県石巻市